

# 第 22 回映像メディア英語教育学会

## 九州支部研究大会

The 22nd ATEM Conference of Kyushu Chapter

[日時 Date] : 2021 年 3 月 14 日 (日) 13:00- (March 14<sup>th</sup>, 2021)

[会場 Place] : オンライン開催 (Zoom Web Conference)



# 第 22 回映像メディア英語教育学会九州支部研究大会

[会場 Place] : オンライン開催 (Zoom)

URL: <https://us02web.zoom.us/j/83992425394?pwd=Z2d0aVIWb0RUazVBN3ZsSXJKcGFxZz09>

ミーティング ID: 839 9242 5394      パスコード: tqThE3

[日程 Date] : 2021 年 3 月 14 日 (日)      (March 14, 2021)

## 13:00~13:10 開会式・支部総会 Opening Ceremony

- ・開会のあいさつ      支部長 : 吉村 圭
- ・2019 年会計報告&2020 年度予算案
- ・2020 年度運営組織の紹介

## 13:10~14:35 研究発表 Sessions

### Session1. 13:10-13:35

19 世紀英語文学に対する先入観緩和のためのアダプテーション作品の活用

秋好 礼子 (福岡大学)

### Session2. 13:40-14:05

“A Street Cat Named Bob”に見るイギリス社会分析

村田 希巳子 (北九州市立大学・非)

### Session3. 14:10-14:35

ディズニー版「プー」に見る 21 世紀のジェンダーロールの変遷

吉村 圭 (鹿児島女子短期大学)

## 14:40~ 閉会式 Closing Ceremony

- ・開会のあいさつ      副支部長 : 秋好 礼子

【発表1】 Session1 13:10-13:35

## 19世紀英語文学に対する先入観緩和のためのアダプテーション作品の活用

秋好 礼子 福岡大学

司会：林 裕二

海外小説を原文で1冊読破するという事は、学生にとってなかなかハードルが高い。普段使い慣れない古い英語となると、さらにやる気を削がれる学生も少なくない。そこで、文学作品を精読する過程でアダプテーション作品を複数使うことにより、文学作品を読むのはおもしろいということを学生に体感させ、かつ学生の作品理解・考察を深める方法を考えたい。今回は、19世紀のアメリカ人作家 Mark Twain の *The Adventures of Tom Sawyer* を取り上げる。本作品は世界中で知られた小説で、多種多様なアダプテーション作品がある。ただ、現在の大学生世代は、主な登場人物の名前を聞いたことがあっても、あるいは、東京ディズニーランドのトムソーヤ島に行ったことがあっても、その原作を読んだことはあまりないようである。有名でありながら完読されることが少ない作品の好例で、児童小説と思われがちだが、実際に読んでみれば、その先入観を覆す内容であることがわかる。身体的特徴、人種、階層といった問題に焦点を当て、授業で本作品を使った経験を紹介しながら、この作品の魅力伝える方法を考察する。

【発表2】 Session2 13:40-14:05

## “A Street Cat Named Bob”に見るイギリス社会分析

村田 希巳子 北九州市立大学・非

司会：林 裕二

『ボブという名の猫 幸せのハイタッチ』は、2017年の英国ナショナルフィルムアワードで最優秀英国映画賞を受賞した作品である。親の離婚で家族から捨てられたジェームズは、精神的に不安定となり、ストリートミュージシャンとしての収入も見込めず、次第に麻薬に手を染め、ホームレスの生活を余儀なくされる。けれども野良猫ボブとの交流を通し、周囲の温かいサポートと、本人の大奮闘の結果、見事に再生を果たすのである。この映画には、タイトルを含め、文学的な要素が多く散りばめられているが、主人公が闘わなければいけない相手は、貧困、差別、麻薬などイギリス実社会の闇の部分である。この映画は実話を元にしたもので、モデルになった猫がそのまま出演しているので、話にとっても迫力があり、説得力を伴う。本発表では、猫が救ったジェームズの再生物語を通して見えてくるイギリス社会の闇の部分进行分析し、考察していきたい。

【発表 3】 Session3 14:10-14:35

## ディズニー版「プー」に見る 21 世紀のジェンダーロールの変遷

吉村 圭 鹿児島女子短期大学

司会：松尾 祐美子

英文学史上、A. A. Milne が著した小説 *Winnie-the-Pooh* ほど幾度も映像化された作品は他にないだろう。ディズニーは 1966 年の最初の短編アニメーションを公開して以降現在にいたるまで、映画、テレビシリーズ、ホームビデオ等、コンスタントに「プー」を映像化してきた。そして 2018 年に公開された実写化映画 *Christopher Robin* (邦題『プーと大人になった僕』) が現時点での最新の作品にあたる。

Frederick Crews は、Milne が著した原作小説において唯一“*She*”で語られるカンガを「物語の周辺に位置付けられた」(peripherally included in the story) キャラクターであり、その発言は「鼻につく面白味のない『母親言葉』から一步も出ることはない」(Her speech never wavers from the blandest and most cloying ‘motherese’) と指摘している。その指摘の通り、原作での物語の中心は常に男性キャラクターであり、カンガには「母親らしさ」の意味しか与えられていない。本発表では、Crews が原作に対して定義したカンガ(女性)の「周辺」性、あるいは「母親らしさ」をキーワードに、とりわけ 2000 年代以降のディズニーによるアダプテーションについて議論する。そして作品内で女性にいかなる役割が与えられてきたのかを比較することで、21 世紀という時代におけるジェンダー観の変化について考察する。